

文字を正しく書く力を楽しく身につけ、進んで生活に生かそうとする子の育成 － 筆を活用した1年国語科書写「津平小かるたを作ろう」の実践を通して －

西尾市立津平小学校 宮川 麻美

1 主題設定の理由

入学以来、本学級の子どもたちは、書写の学習に楽しく取り組んでいる。「正しい文字あてクイズが大好きだよ。」「試し書きより整って書けたよ。」などと喜んで学習し、文字の形に注意して、丁寧に書けるようになってきた。各単元の最後には、暑中見舞い、運動会の招待状などをおうちの人に書いて、とても喜んでいただけたことで、学習を日常に生かす喜びも味わい始めている。正しい姿勢や鉛筆の持ち方についてもかなり意識が高まっている。しかし、全員の子が正しい姿勢や持ち方が身につけているとは言えない。また、「止め」「払い」などの筆使いを、書写ですでに学習したが、鉛筆で書く時には、一生懸命書こうとして余分な力が入りすぎ、書き続けると疲れてしまう子が多い。

学習指導要領では、「文字を正しく整えて書く力を付けること」を、書写の学習のねらいとしている。さらに、「書写の指導については、実際の日常生活や学習活動に役立つよう、内容や指導の在り方の改善を図る。」としている。本校では、それを踏まえ、「気づき、考え、行動する津平っ子の育成一言語活動を支える『津平の書写』の構築―」を研究主題とし、だれもが喜んで学ぶ課題解決的な書写学習を展開し、それを日常の言語生活に生かす姿を求めて、平成22年度からの研究を継続している。

本校の研究にそって、まず、姿勢や筆記具の持ち方、筆使いに気をつけて、文字を正しく書く力を楽しく習得させたいと考えた。そこでは、筆を活用した実践を取り入れ、余分な力を抜いた正しい筆使いの感覚をつかませ、それを硬筆に生かしたいと考えた。そうすることが、指導要領（高学年）の「書く速さを意識して書く」ことにつながるであろうと考える。さらに、習得した学びを進んで生かし、日常生活の中でさらさらと正しく書くことができる子どもたちの姿を願った。

2 めざす子ども像

- ①姿勢・持ち方や筆使いに気をつけて、文字を正しく書く力を楽しく身につける子
- ②習得した学びを、進んで日常生活の中で生かそうとする子

3 研究の仮説と手立て

<仮説1> 1年生で筆を活用した単元を構想し実践することで、筆使いに気をつけて、文字を正しく書く力を楽しく身につけることができるであろう。

(手立て) ・教材提示装置を活用し、正しい筆使いが視覚的に分かるようにする。
・見て、気づき、考え、話し合う時間を設定し、筆使いについて理解させる。
・擬音語（とん、すうっなど）で、筆使いをイメージして書けるようにする。
・楽しく学習できる筆用自作練習用紙を開発する。
・隣同士で書いている姿を見合い、正しい筆使いを意識して書くようにする。
・机間指導で一人一人へ寄り添って支援し、学習内容をどの子にも習得させる。
・教師が褒め励ます機会を多くすることや、自己批評・相互批評、自己評価・相互評価を行うことで、意欲の継続を図る。

<仮説2> 単元の中に相手や目的を意識して書く授業を設定することで、習得した学びを進んで日常生活の中で生かすことができるであろう。

(手立て) ・保育園の子たちとの交流のために、津平小かるたの作成をする。
・整えて書きたいという思いをもたせるため、手本を見ずに試し書きをさせる。
・一人一人の子ども用にかかる手本を教師が作成する。

・おうちの人に、かるたを見た感想を書いてもらい、今後の意欲につなげる。

＜仮説3＞1週間に2回のかきかきタイムを充実させることで、姿勢・持ち方や筆使いに気をつけて、日常生活や学習活動の中で書くことができるようになるであろう。

・書写体操や合い言葉の継続で、正しい姿勢や筆記具の持ち方の意識を高める。

・鉛筆持ち方矯正具（通称、結婚指輪）を継続して活用する。

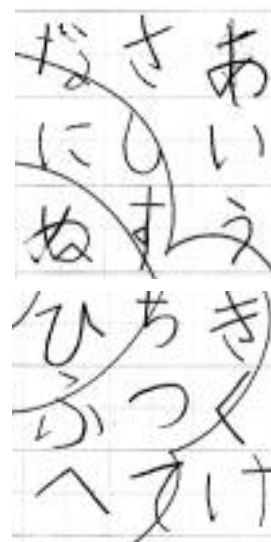
・かきかきタイム前の5分間指導、一人一人への個別支援を大切にする。

・硬毛筆のかきかきタイムと鉛筆のかきかきタイムを行うことで、筆使いの感覚を硬筆に生かすことができるようにする。

4 実践と考察

(1) A児にかける願い

A児は、1学期から正しい文字当てクイズが大好きで、字形を意識して文字を書くことができるようになってきた。しかし、正しい姿勢や持ち方が継続できず、いつも力を入れて書いていて、長く書くと疲れてしまう。「止め」「払い」「はね」の筆使いを学習した後も、「あ」「う」などは、力を入れたまま止めており、すうっと力を抜いて払えない。「き」も、力を抜いてはねることができない。**(資料1)** A児が、文字を正しく整えて書く力を楽しく身につけ、さらに、習得した学びを生活の中で生かすことができる子になることを願う。そうすることは、A児だけでなく他の子どもたちも育てることになると考え、本研究の抽出児とした。



(資料1) 本単元前のA児のかきかきノート

(2) 単元について

単元の目標を次のように考え、単元を構想した。

・姿勢や筆記具の持ち方に気をつけて、楽しく学習できる。(関心・意欲・態度)

・「止め」「払い」「はね」の筆使いの感覚をつかみ、筆使いに気をつけて書くことができる。

(習得)

・習得したことを生かし、津平小かるたを書くことができる。(活用)

(3) 「気づく」の段階から

～かるたの読み札を、もっと整えて書きたい～

1/5時の目標は、「かるたの試し書きをし、もっと整えて書きたいという気持ちをもつことができる。」とした。生活科の学習で、子



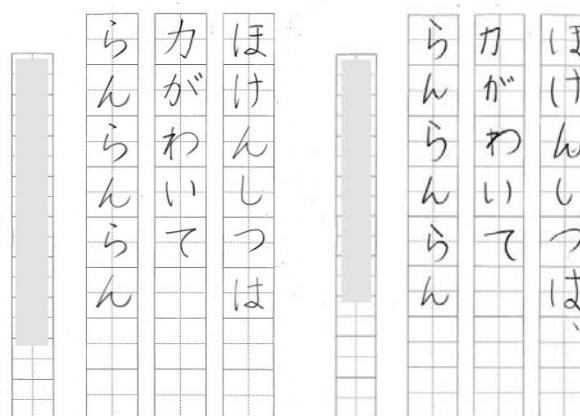
(写真1) 結婚指輪

どもたちは、保育園の子たちとの交流で、自分たちで作ったかるたで遊ぶ計画を立てた。入学してくる津平小学校のことを教えてあげる内容の「津平小かるた」を作ろうと決めた。A児が考えた読み札の言葉は、「ほけんしつは 力がわいてらんらんらん」。保健室で心まで元気になるという子どもらしい言葉が微笑ましい。

本時では、まず、手本を見ずに自分の読み札の言葉を書いた。

いつも通り人差し指と鉛筆が寄り添うよう

に持ち方矯正具（通称、結婚指輪）**(写真1)**をつけ、「足の裏べたっ、背すじぴん、おなかと背中にぐう一つ、持ち方確かめ、左



(資料2) 教師作成の手本

(資料3) A児の試し書き

手とんで、さあ書こう。」と、全員で合い言葉を唱え、一斉に書いた。その後、教師作成の手本（資料2）と比べさせた。「手本と違うよ。」「保育園の子が喜ぶように、もっと上手に書きたい。」などのつぶやき。A児の文字は全体的に力が入っており、「し」「力」の「払い」など正しく書けていない。（資料3）他の子たちの文字も、力が入っている子が多い。「もっと整えて書きたい子。」教師が聞くと、全員が挙手した。こうしてまず試し書きと手本を比べさせたことで、子どもたちは、保育園の子たちのために、もっと整えてかるたの読み札の文字を書きたいという思いをもつことができた。



（4）「考える・深める」の段階から（習得）

ア すうっとやさしく書けたよ

2/5時の目標は、「『とん、すうっ、ぴたっ』（横画、縦画）の筆使いに気をつけて、筆で練習することができる。」とした。鉛筆より弾力のある筆を活用して筆使いを楽しく体感させ、A児も他の子も「とん、すうっ、ぴたっ」の感覚をつかませたいと考えた。

（写真2）教材提示装置の活用

「やったあ、筆だよ。」子どもたちは、授業の前から大はしゃぎ。

1学期の終わりに筆遊びをしたときから、子どもたちは筆を使うことが大好きだ。筆は、1年生の子どもたちでも持ちやすく使いやすい三角絵筆（書写の小筆くらいのもの）を全員が使っている。

授業のめあての確認の後、「先生が書くから見ていてね。」教師の声かけで、子どもたちは、真剣にテレビの方を見る。「とん（始筆）、すうっ（送筆）、ぴたっ（終筆）」教師が横画を書く筆の動きと、子どもたちの元気な声が自然にそろそろ。一体感が、なんとも心地よい。（写真2）「先生は、どんなふう書いていましたか。」教師の発問に、多くの子が挙手する。「鉛筆の持ち方で書いていました。」「とんで筆を止めていました。」「ぴたっも筆を止めていました。」と発言が続いた。



（写真3）2/5時授業

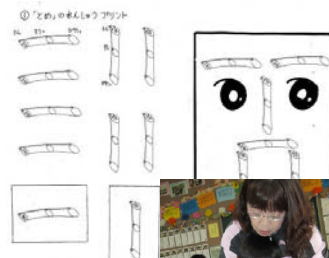
「止めるところは、よく分かるね。すうっは、どんなふう書いていましたか。」と切り返した。「とんは、ちょっと強い力を入れるけど、すうっは、普通の力です。」「すうっは、やさしく書いていました。」「ぴたっは、すうっより強い力でした。」子どもの気づきに感心する。「すごいね、みんな。今度は悪い例を書きます。」2回目は、筆の穂

全部を使って力を入れ続けて書いた。「悪い例は、とん、すうっじゃなくて、ここがすごく太くてとん、ぎいっだからだめです。」とH児が前に出てきてはりきって発言した。（写真3）A児も前に出てきて、「1回目は筆の先の方ですうっと書いたけど、悪い例はぎいっと力を入れて書いていました。」と発言した。「そうか。すうっは筆の先の方で書くんだね。Aちゃんすごいね。」A児は褒められて、とてもうれしそうだった。「筆の先だね。」と子どもたちからの声。教師は、子どもたちの発言を板書にまとめた。（写真4）こうして子どもたちは、「とん、すうっ、ぴたっ」（横画、縦画）の筆使いを視覚的にとらえることができた。



（写真4）2/5時板書

「みんなも、ここに筆で書いてみるよ。」練習用紙を見て子どもたちは大喜び。練習用紙は、子どもが楽しく取り組めるように、横画と縦画で顔の絵になるものを取り入れて作成した。また、力を入れすぎないように、筆の穂先半分くらいで書ける



（資料



太さの籠書きシートにした。(資料4)「初めは、絵の具なしで、筆だけで書くよ。」そう声をかけ、筆の持ち方を確認した。鉛筆と同じように持たせ、練習用紙を筆でなぞらせた。机間指導で持ち方の正しくない子を支援した。弾力のある筆の感覚を、子どもたちは楽しんでた。

筆に絵の具をつけて、「足の裏**ぺたっ**、背筋**ぴん**、おなかと背中にぐう一つ、持ち方確かめ、左手**とん**で、さあ書こう。」鉛筆の時と同じように全員で合い言葉を唱え、姿勢・持ち方を確認した。「**とん、すうっ、ぴたっ**。」子どもたちは、小さな声を出しながら、筆を進めた。「先生、できた。」うれしそうな声。「すごく楽しい。」つぶやきながら、子どもたちは夢中で書く。教師は、持ち方が正しくない子を支援した。(写真5)

(写真5) 個別支援

「最後に、まとめ書きをしましょう。隣同士でペアになって、順番に書くよ。見ている子は、隣の子を応援する気持ちで見ているね。」教師が言うと、先に書く子は、筆を持ち、合い言葉を唱えて、練習用紙の一番下のマスにまとめ書きをした。まとめ書きの時は、教師は声をかけずに見守る。隣の子が寄り添って見ている姿も、微笑ましい。(写真6) 静かな空気が流れる。横画、縦画と続いて書く。A児も真剣だ。書き終わると、教師に「先生、**すうっ**とやさしく書けたよ。」と、にっこりして教えてくれた。籠書きシートからはみ出していないことから、筆の先を使って力を抜いて書いていたことが分かる。(資料5)

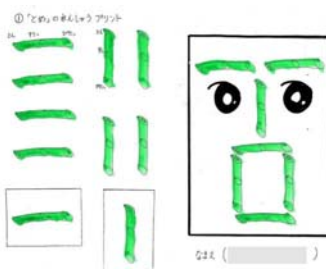


(写真6) まとめ書き



(写真7) 友だちを褒める

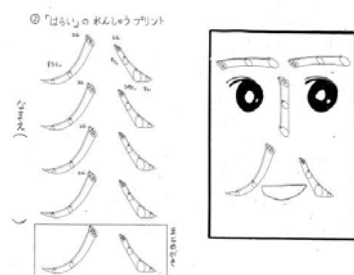
その後、ペアの二人で書いた文字を見て、自己評価、相互評価をした。全員が書き終わったことを確認して、「隣の子を褒めることができる子いますか。」と聞くと、見ていたほとんどの子が挙手した。「Aちゃんを褒めます。**とんとぴたっ**で止めていて上手でした。」(写真7) A児は、友達からも褒められ、ここでもうれしそうだった。2/5時、子どもたちは、楽しく筆で「**とん、すうっ、ぴたっ**」の感覚をつかみ始めた。筆の活用を継続することで、筆使いの感覚をさらにつかむことができると感じた。「次の書写は、『払い』を筆で書くよ。」教師の言葉で大喜びする子どもの姿に、教師も次の時間が大変楽しみになった。



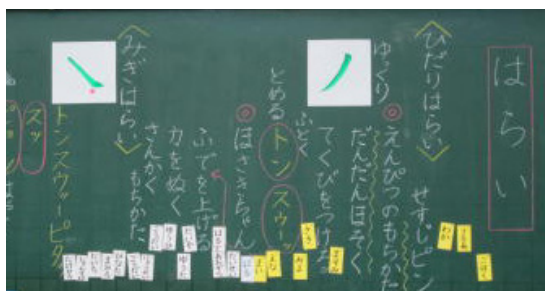
(資料5) 筆で書いた練習用紙

イ もっと何回も練習したい

3/5時の目標は、「『払い』の筆使いに気をつけて、筆で練習することができる。」とした。めあての確認の後、まず、2/5時の練習用紙を見せた。(資料6)「ひげがある。」「社長さんみたい。」と盛り上がる。書く意欲をもたせた後、1/5時と同じように、「まず先生が書くから見ていてね。」と声をかけ、教材提示装置で「左払い」を書くところを見せた。今回は、黒板に提示する画用紙に書くだけでなく、子どもと同じ練習用紙に書くところも見せた。前時に練習用紙の書き方の説明に時間がかかってしまったからだ。「先生は、どんなふう書いていましたか。」教師が聞くと、たくさんの子が挙手した。「背筋ぴんで書いていました。」「鉛筆の持ち方で書いていました。」に続き「だんだ



(資料6) 3/5時 自作練習用紙



(写真8) 3/5時 板書

ん細く書いていました。」「初めに**とん**で止めて、**すうっ**って書いていました。」と発言が続いた。「**すうっ**のところで、詳しく言える子いますか。」と聞くと、A児の「だんだん力を抜いていました。」に続き、「(練習用紙の)穂先ちゃんの向きで書いていました。」「ゆっくり払っていました。」「筆を上にも上げるみたいでした。」と続いた。教師は、子どもの発言を聞きながら板書にまとめた。(写真8)「すごいね。みんなよく見ていたね。」1/5時に続き、子どもの見る力に感心して褒めた。

「早く書いてみたいな。」「先生、書こうよ。」子どもたちは、やる気満々。前時と同じように、絵の具をつけずに練習用紙をなぞらせた。そして、絵の具をつけ、合い言葉で姿勢や持ち方を確認し、書き始めた。「おおっ書けた。」「きれいに払えた。」小さな声でつぶやく。教師は、前時と同じように、持ち方の正しくない子を支援した。A児は、1回目は教師が手を取って一緒に書いたが、2回目は、「**すうっ**。」と小さな声で言いながら、ゆっくり筆を少し上にも上げてうまく払えた。「うまく払えたね。すごいよ。」教師がそばで褒めると、満足そうに笑顔を返してくれた。

続けて、「右払い」。「左払い」と同じように、教師が書くところを見せた後、「先生は、どんなふうには書いていましたか。」と聞いた。「**とん、すうっ、ぴたっ**と書いてから、**すっ**と払っていました。」「『右払い』より、はやく払っていました。」同じような発言が続いた。「『左払い』とどう違いますか。」教師は切り返した。「『左払い』は**すうっ**とゆっくり払ったけど、『右払い』は、**すっ**とすぐに払いました。」に続き、T児が、「**ぴたっ**がすごく太くて、急に細くなりました。」と発言した。T児の発言の後、なぜ太いのかをみんなに考えさせ、きちんと止めてから右に払うという確認をしておくとうよかった。『左払い』の練習でだいぶ時間がかかったため、**ぴたっ**と止めるという確認が不十分のまま、ここで右払いの練習に入った。どこかで**ぴたっ**と止めることを、子どもたちにしっかり確認する必要性を感じた。

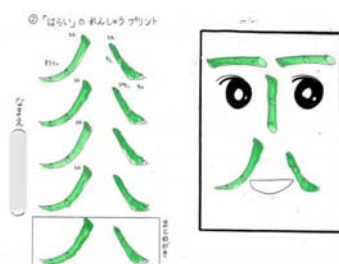
子どもたちは、はりきっていたが、「右払い」は、「左払い」に比べ難しそうだった。**ぴたっ**ときちんと止めてない子もいた。「『左払い』より難しいよ。」「全部書いたけどもっと何回も練習したい。」と、子どもたちの声。もう少し練習したいが、残り時間が少なくなってしまったので、「今日はここで、まとめ書きをしようね。」と声をかけた。

ウ 左払いがすうっとゆっくり書けてよかった

前時と同じように、隣同士でペアになって順番に書いた。筆の持ち方を確かめ、合い言葉を唱えて集中して書き始めた。書いている子の筆の動きに合わせて、隣で見ている子が、「**とん、すうっ**。」(左払い)、「**とん、すうっ、ぴたっ、すっ**」(右払い)と小さな声で言っている。見る子のさりげない小さな声の支援で、書く子が一層筆使いを意識できている。一人が書き終わると、二人で見合って相互評価した。(写真9) A児は、

「『左払い』がすごく**すうっ**とゆっくりうまく払えたよ。(資料7)『右払い』は、**ぴたっ**ができるともっとうまく書けるよ。」と、隣の子に評価してもらった。鉛筆の時は、正しい持ち方が続かず、力を入れて書き、『払い』もうまくできないときが多かった。この2/5時で、正しい持ち方で、『左払い』ができたことを実感でき、A児はとてもうれしそうだった。

全員がまとめ書きを書き終わった後、教師は「Uちゃん、すごく上手になったので、最後に前で書いてみましょう。」と声をかけた。U児も、A児と同じように、鉛筆の時はどうしても力を入れたまま書くことが多かった。教材提示装置の前で、U児は左払いを**すうっ**のところで



(資料7) A児の練習用紙



(写真9) 相互評価



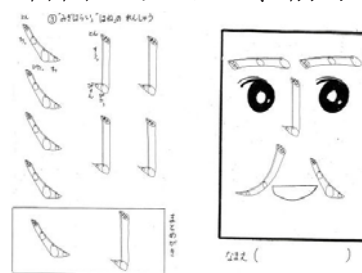
(写真10) 教材提示装置の活用

穂先を使って、少し力を抜いて書いた。「右払い」も**ぴたっ**と一度筆を止めて、**すっ**とうまく払えた。(写真10)「上手。」「すごい。」と子どもたちからの声。U児は、とてもうれしそうだった。「Uちゃんを褒めれる子いますか。」と教師が聞くと、たくさんの子が挙手した。「Uちゃんは、『右払い』で、一度**ぴたっ**と止めてから、**すっ**とはやく払っていて上手です。」同じような意見が続いた。「そうだね。一度**ぴたっ**と止めるといいんだね。」ここでやっと右払いの書き方を、みんなで確認することができた。

授業の最後の振り返りで、A児は、「筆が、すごく楽しかったです。『左払い』が**すっ**とゆっくり書いてよかったです。『右払い』もUちゃんみたいに書けるようになります。」と元気よく発言した。「次の書写も筆で勉強したい。」「やりたい、やりたい。」元気いっぱいの子どもたち。絵日記に書写のことをかく子もいた。子どもたちのやる気がうれしくて、教師も次の時間がまた楽しみになった。

エ 筆のまねをして、鉛筆で書きたい

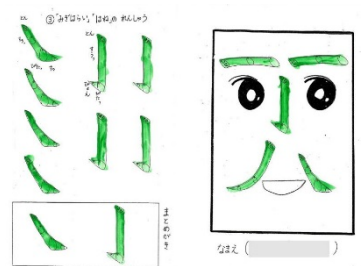
4/5時の目標は、「『右払い』と、『はね』の筆使いに気をつけて、筆で練習することができる。」とした。単元構想では、「はね」の練習だけの計画であったが、前時に「右払い」の書き方の確認が不十分であったこと、子どもたちから「右払い」がもっと練習したいという声があったことから、もう一度「右払い」について少し復習してから「右払い」を練習することにした。練習用紙は、「右払い」と「はね」の両方の練習用に作成し直した。(資料8)



(資料8) 4/5時 練習用紙

前時までと同じように、教材提示装置を活用して、教師が「右払い」を書いてから、どんなふう書いていたか確認した。前

時に不十分だった、一度止めてから**すっ**と払うことを押さえた。4/5時では、子どもたちは3/5時よりも、「右払い」の筆使いを理解し、筆でその感覚をつかむことができたことが練習の様子から分かった。



(資料9) 4/5時 練習用紙

続けて、「はね」。「払い」と同じように授業を進め、**ぴたっ**と一度止めてから、斜め上に**ぴょん**と払うこと、すぐ細くなることを確認してから、練習した。「はね」は、1年生の子どもにとって、筆できれいにはねることは難しい。しかし、その感覚を筆でつかむことができたことが、練習の様子や練習用紙から分かった。

(資料9)

授業の振り返りの時、子どもたちは、「筆が楽しかったです。」「また、やりたいです。」と発言でき、筆の学習を十分楽しめたようだった。「次の時間に、かるたの読み札の文字を書くとき、どんなことに気をつけるといいですか。」教師が聞くと、A児は、「筆



(写真11) 4/5時 板書

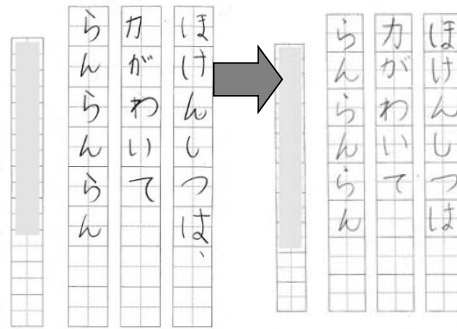
のまねをして、鉛筆で書きたいです。」と発言した。「筆のまねをする」という言葉に、筆の練習を硬筆に生かそうとしている素直な子どもの気持ちを感じ、とても感激して「筆のまね」と板書し、授業を終えた。(写真11)

(5) 「まとめる、生かす」の段階から ～ 早く保育園の子と遊びたいな ～

5/5時の目標は、「筆の学習を生かして、かるたの読み札を書くことができる」とした。前時までの筆の活用が、かるたの読み札の文字に少しでも生きてくることを願った。

授業の初め、授業のめあて「かるた」と黒板に書くだけで、子どもたちからは、「やったあ。」の声。子どもも教師もわくわくする。教師作成の手本と、手本と同じ大きさで同じ枠の練習用紙を配布した。

「かるたの読み札を、だれのためにどんな気持ちで書きますか。」と聞くと、「保育園の子たちに、ぼくたちと一緒に遊ぼうねという気持ちで書きます。」「津平小学校は楽しいから来てねという気持ちで書きます。」と発言が続く。こうして、どの子も相手意識・目的意識をしっかりと確認できた。



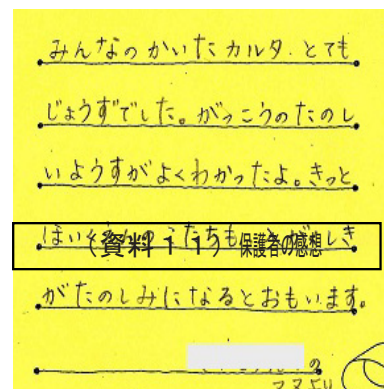
「そういう気持ちで書くといいね。そういう気持ちを伝えるには、どんな文字で書くといいと思いますか。」続けて発問した。「気持ちのこもった文字で書きます。」「整った文字で書きます。」「読みやすい文字で書きます。」に続いて、A児が、「筆の時みたいにすうっとやさしく書きたいです。」と発言した。筆の学習で力を抜いてすうっと書けたことがとてもうれしかったのだと思う。「筆のまねをするんだよ。」続けて子どもたちからの声。筆の学習が生きていると感じた。「すごいね。筆の勉強を思い出して、自分たちの気持ちが伝わるように書きましよう。」と、教師は声をかけた。合い言葉を元気よく唱え、手本を見ながら練習用紙に書く。教師は机間指導、子どもは自己批評、隣の子同士で相互批評も行った。

いよいよ本番。すうっぴたっ。小さな声が聞こえる。筆使いに気をつけて書いていることが分かる。相手意識・目的意識がはっきりしているときの子どもの集中力は、いつもすごい。A児も、正しい鉛筆の持ち方で、余分な力を抜いて書いていた。「先生、筆のまねをして書いたよ。

試し書きと全然違うよ。『払い』もうまくなったよ。」そう言って書き上げたかるたの作品を教師に見せてくれた。(資料10) (資料3) A児の試し書き (資料10) A児のかるた

「すごいよ。保育園の子が喜んでくれるよ。」教師がそう答えると、A児は本当にうれしそうだった。かるたの作品では、試し書きで書けなかった「し」、「力」の「払い」が正しく書け、全体に余分な力も抜けていることから、筆の学習が生きていることが実感できた。

2学期末の保護者会するとき、全員のかるた作品を廊下に掲示した。保護者の方の中には、感想を書いてくださった方がいた。(資料11) 子どもたちに紹介すると、「ママたちも褒めてくれたよ。早く保育園の子と遊びたい。」と大喜び。交流を心待ちにしていた。



(6) かきかきタイムの充実

～力を抜いて書くと、たくさん書けるね～

本校では、毎週月曜日と木曜日の5時間目の後に「正しく速く整えて」書く力をつけるために、全校かきかきタイムを10分間行っている。1年生は、教師が視写用国語教科書(子どものノートと同じマスの手本)を作成し、それを視写する。

4月からのかきかきタイム、そこでは、デジタル教科書の書写体操の実施、書く前の合い言葉「足の裏ぺたっ、背筋ぴん、おなかと背中にぐう一つ、持ち方確かめ左手とんでさあ書こう」の継続、結婚指輪をつけること、姿勢や持ち方の個別指導で、子どもたちは、正しい姿勢や持ち方を意識



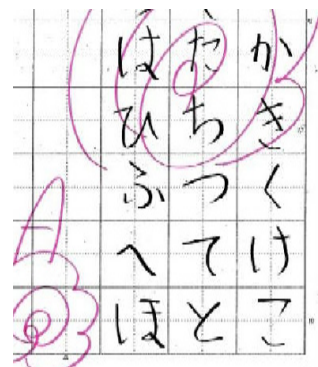
できるようになってきた。しかし、A児は、以前からかきかきタイムで「たくさん書くのは疲れる。」と言っていた。姿勢もあまりよくなく、力を入れたままで書き続けようとするからだ。他にも同じような子たちがいた。

本校では、本年度から筆使いをなめらかにし、硬筆でさらさらと書いて日常生活に生かすようにするために、高学年では筆ペンのかきかきタイム、低学年では硬毛筆のかきかきタイム（写真12）を実施した。

（写真12）かきかきタイム

3/5時の筆の学習の後、子どもたちが、かきかきタイムに鉛筆で書く文字に、変化が出始めた。今まで、鉛筆ですうっと「払い」ができなかった子ができるようになったり、力を少し抜くことで、書く行数も増えてきたりした。この筆使いの感覚をもっと定着させたいと考え、硬毛筆のかきかきタイムを4回連続で行った。

1回目は、10分間、机間指導で一人一人の手を取って一緒に書いた。「魔法のペンだ。」硬毛筆を使うと、鉛筆よりも力を抜いて書けたり、「払い」がすうっときれいに払えたりして、子どもたちから大人気になった。A児も喜び、筆の学習の効果と重なって、回を重ねるごとに、筆でつかんだ感覚を硬毛筆で書くときにも生かしていることが、ノート上の文字から分かった。（資料12）

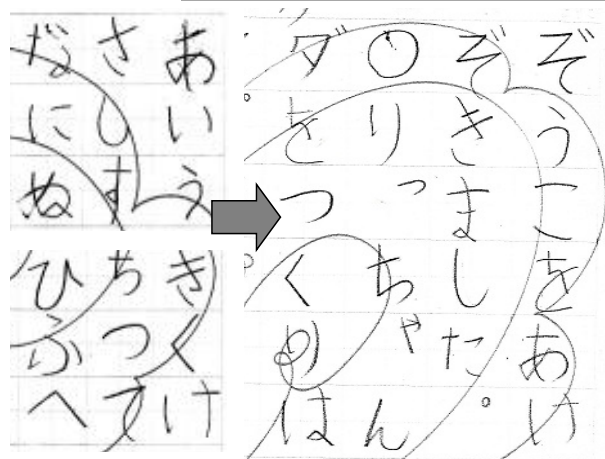


さらに、かきかきタイムの前の5分間指導を大切にした。「正しい姿勢や持ち方をするのは、長く書いても疲れなためだよ。」ということは、4月から何度も話した。また、本単元で筆の学習をしてからは、授業で使った筆を使って、絵の具を使わずに文字を書くイメージトレーニングをしたり、水書ボードを使って筆遊びをしたりして、短い時間で筆の感覚を思い出させるようにした。

本単元学習後、そして4回の硬毛筆によるかきかきタイム実施の後で、鉛筆のかきかきタイムにもどした。硬毛筆でつかんだ筆使いの感覚を、硬筆に生かすためだ。そこでは、A児の姿勢や持ち方は、とても正しくなり、全体的に

（資料12）A児の硬毛筆で書いたかきかきノート

余分な力を抜いて書いていた。「あ」「う」「け」「し」など文字の「払い」が正しくできるようになり、全体的になめらかな筆使いで書けるようになったことが文字から分かる。（資料14）「先生、10行も書けた。力を抜いて書くとたくさん書けるね。かきかきタイムが好きになったよ。」A児が笑顔で言った。「たくさん書くのは疲れる。」と言っていた頃からの成長を感じた。



5 研究の成果と今後の課題

＜研究の成果＞

・1年生で筆を活用した単元を構想し実践をした。その中で、「やったあ、筆だよ。」

「すうっとやさしく書けたよ。」「筆がすごく楽しかった。『左払い』がすうっとゆっくりかけてよかった。」など、筆の感覚をつかみ、筆使いに気をつけて、文字を正しく書く力を、楽しく身につけていくことができた。

・「かるたの読み札をもっと整えて書きたい。」という思いを子どもたちにもたせ、相手意識・目的意識のはっきりした日常に生かす授業を展開した。そうする中で、「筆のまねをして鉛筆で書きたい。」「筆の時みたいにすうっとやさしく書きたい。」と、筆の学習を生かしてかるたを真剣に書き上げ、進んで日常生活に生かそうとすることがで

（資料1）本単元前のA児のかきかきノート

（資料13）本単元後のA児のかきかきノート

きた。

・週2回のかきかきタイムの充実を図った。本年度、硬毛筆を新しく活用した。そこでも、「力を抜いて書くと、たくさん書けるね。」など、筆の学習、硬毛筆のかきかきタイムでつかんだ筆の感覚を生かして、硬筆で書くことができるようになってきている。ノートや連絡帳に書くときなどの日常生活や学習活動に生かすこともできつつある。

＜今後の課題＞

・筆を活用することで、筆使いの感覚をつかみ、鉛筆で力を抜いてさらさらと書くことができるようになることを願い実践した。3年生で学習する毛筆を1年生で行うということではなく、弾力のある筆の感覚を楽しくつかんで、硬筆に生かしたいと考えた。多くの手応えを感じたので、低学年での筆の活用について、今後も研究を進めたい。それぞれの場面で効果的に書き、日常生活に生きる、国語学習全体の下支えとなる書写をめざしたい。

「津平の書写」の研究の講師を継続してくださっている横浜国立大学教授青山浩之先生はじめ、多くの先生方のご指導に心から感謝している。そして、教師と一緒に、いつもはりきって最後までがんばる素直な子どもたちを愛おしく思う。今後も、大好きな津平の子どもたちのために、大変微力ではあるが、「津平の書写」の継続・発展に尽くしたい。